

付 録

うつ症状改善へ新たな選択肢

最新の治療法導入



県立こころの医療センター 駒ヶ根

磁気で脳の部位刺激

4日から提供

県立こころの医療センター（駒ヶ根）は、白く、薬液は効果十分ではない「治療抵抗性うつ病」患者に対する新たな治療法として、「反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）療法」の提供を始める。専用機器を使って特定の脳の神経細胞を繰り返し刺激し、うつ症状を改善する最新の治療法。同治療法の提供は県内で初めてという。

（田中まゆ）
専用機器を患者の頭に装着し、磁気刺激の部位を調整し、神経細胞を刺激する方法。うつ病に効果があるという。治療は、脳内神経細胞の興奮性を高め、活動性が高まる。左側頭前野刺激を受けるため、頭の左側に外から磁気刺激を。1回の治療時間は約40分。rTMSは2017年に国が承認し、19年に保険適用された。治療対象は成人（18歳以上のうつ病患者）で、rTMS療法は、うつ病の症状を改善する。rTMS療法は、県立こころの医療センター 駒ヶ根に導入された。

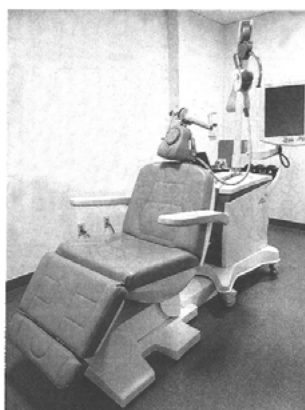
（石川才子）
日本でも承認され、一九年に治療が保険適用となったため、同センターで導入に向けて進めていた。担当者は「薬を試したけれど良くならず、苦しんでいる人に、治療の新たな選択肢として提供したい」と話している。

うつ症状に「磁気刺激療法」

駒ヶ根の医療センター 最新機器導入

県立こころの医療センター（駒ヶ根市下平）は、四日、うつ症状を改善する治療のため、最新の専用機器を導入して「反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）療法」を始めた。県内では二施設目。南信では初めてという。

薬で効果不十分な患者対象



反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）療法を受けられる機器＝駒ヶ根市で

（石川才子）
日本でも承認され、一九年に治療が保険適用となったため、同センターで導入に向けて進めていた。担当者は「薬を試したけれど良くならず、苦しんでいる人に、治療の新たな選択肢として提供したい」と話している。

令和4年7月5日 中日新聞

令和4年7月1日 長野日報

うつ病治療 新たな選択肢

こころの医療センター 駒ヶ根 機器導入



うつ病治療のために導入した機器

県立こころの医療センター 駒ヶ根（駒ヶ根市）は、磁気で脳の神経細胞を刺激してうつ症状の改善を促す治療機器を導入した。医師らがカウンセリングする認知行動療法や薬物療法が一般的なうつ病の治療に新たな選択肢が加わる。

磁気で脳の神経細胞刺激

（反復経頭蓋磁気刺激療法（rTMS）の治療機器）
国内では2019年6月、rTMSを使ったうつ病治療が保険適用が認められた。同センターによると、県内での導入は手曲荘病院（上田市）に次いで、この日、今月4日に使い始めた。医師が、薬などで症状が改善しない場合に、磁気刺激の必要性を判断する。患者は椅子に座り、医師が脳の頭頂部で本来の機能が低下したり過活動になったりしている部位を磁気で刺激。最長6週間の入院が必要で、週5回、1日40分程度の治療をする。

令和5年7月14日 信濃毎日新聞



県こころの医療センター駒ケ根が開所した精神科専門
の訪問看護ステーション＝駒ケ根市下平の同センター

精神科専門の訪問看護ステーション

「こまほす」開所

県こころの医療
センター駒ケ根

県こころの医療センター駒ケ根（駒ケ根市）は1日、訪問看護ステーション「こまほす」を同センターデイケア棟に開所した。精神障がい者が地域の一員として安心して自分らしく生活できるよう、精神科に特化した専門職員が定期的に自宅などを訪ね、相談や必要な支援を提供する。精神科専門の訪問看護ステーションは南信地方で初という。

センターは既に訪問看護事業を長年実施しており、昨年度の事業実績は患者数171人、訪問数約1800回。今年4～6月の実績をみると、10代から90代まで幅広い世代の利用が分かる。精神障がい者の生活支援の地域移行が進んだ背景もあり、精神障がいに対応した地域包括ケアシステムの支援体制の1資源としてステーションを新設した。

ステーションはデイケア棟内の既存の部屋を改修して開設。看護師4人体制で、日中活動や仕事、薬、退院後の生活、福祉サービスの利用などについて患者本人や家族の相談に応じる。場合によって薬剤師や作業療法士ら多職種の職員同伴で訪問し、多面的な支援を展開する。訪問エリアは上伊那地方8市町村。従来はセンターの医師が主

治医となり、主治医が訪問看護サービスの提供を指示した患者だけが利用できなかったが、ステーション新設に伴い、他の医療機関の患者もサービスの利用が可能になった。センターによると、訪問看護が、次の受診までの間、ケアが途切れる期間を埋めることで、症状悪化前の入院につながり入院期間の長期化を抑えることが期待できる。初日は現地で開所式が開かれ、埴原秋児所長（センター院長）が「引き続き地域や医療機関の関係者と連携し、利便性の高い訪問看護の提供に努める」とあいさつした。

（田中まみ）

令和4年8月2日 長野日報

新型コロナウイルス下 おうち時間増で？

摂食障害で入院の子増

県立こころの医療センター 駒ケ根

県立こころの医療センター 駒ケ根（駒ケ根市）で、神経性やせ症（拒食症）などの摂食障害になり入院した子どもの数が、2020年春からの新型コロナウイルスまん延の前後で3倍程度に増えたことが分かった。全国と同様、県内も低年齢で発症する傾向が表れている。センターは、コ

しいが、重い摂食障害のため入院した子どもの数は、18年10月～20年6月（1年9カ月）の6人に対し、20年7月～22年9月（2年3カ月）では18人に増えた。

専門病棟は15床あり、このうち多い時は5床が摂食障害の子でもあった。吉崎洋介医師は「以前はなかった状況」と指摘。背景として家での時間が増えたことや、やせ志向を助長するインターネット情報の影響を挙げる。

門病室4床が重い神経性やせ症の子でも埋まる状況が以前からあり、院内の小児科や専門スタッフとの情報共有を進めている。

専門病棟は15床あり、このうち多い時は5床が摂食障害の子でもあった。吉崎洋介医師は「以前はなかった状況」と指摘。背景として家での時間が増えたことや、やせ志向を助長するインターネット情報

摂食障害は、全く食事が取れない拒食や、衝動的に食べた後の嘔吐などで極端に体重が減る。脳が萎縮し、思春期までの子どもは成長が止まる恐れがある。明らかなやせ願望はないものの食事が取れない、または食に関心がない「回避・制限性食物摂取症」も摂食障害の一つだ。

己肯定感が低いなど、摂食障害になりやすい要素がある」と吉崎医師。周りが気付きにくく、深刻な状態になってから受診するケースも目立つという。一方、摂食障害の専門医は少なく、小児科や内科など地域のかかりつけ医から精神科・心療内科につながる連携を模索。医療機関などへの相談態勢も課題となる。

センターは児童思春期の精神疾患の専門外来、病棟を設け、摂食障害も診察している。月ごとの入院患者数は公表していないため正確な比較は難しいが、2020年春からの新型コロナウイルスまん延の前後で3倍程度に増えたことが分かった。全国と同様、県内も低年齢で発症する傾向が表れている。センターは、コ

信州大病院（松本市）の子どものこころ診療部でも、専門病棟は15床あり、このうち多い時は5床が摂食障害の子でもあった。吉崎洋介医師は「以前はなかった状況」と指摘。背景として家での時間が増えたことや、やせ志向を助長するインターネット情報

「頑張り屋、完璧主義、自己肯定感が低いなど、摂食障害になりやすい要素がある」と吉崎医師。周りが気付きにくく、深刻な状態になってから受診するケースも目立つという。一方、摂食障害の専門医は少なく、小児科や内科など地域のかかりつけ医から精神科・心療内科につながる連携を模索。医療機関などへの相談態勢も課題となる。